まい あーと・組み木絵「風のうた」by 中村道雄

とんかつおいしい立川の街

豚界の美味七店

TONKAI NO BIMI

「豚」カツレツ、あるいはコートレット・ド・ポールと西洋では云うそうで。「とんかつ」は西洋に源を発しましたが、明治以来、日本人の舌と手で限りなく「和食」に近づけた。第一、箸で戴くし、御御御付けが無類によく似合う。そういうお店が立川にもありましたです。豚界の美味——食べてみておいしかった。おすすめデス。

かつ亀

柴崎町3丁目 ☎(25)7647

特製かつ丼 七〇〇円

十年余の修業があけて昨年の暮に開店。かつ丼はまさに〝特製〟。これ食べずして豚界を語るなかれ。

とんかつ大勇

曙町2丁目 ☎(25)0308

ロースかつ 一、〇〇〇円

黒けりゃいいってもんじゃないけどこの店の黒豚は〝旨味一致〟だ。コクのある味は主に似てる、か。

豚小屋

錦町1丁目 ☎(25)1361

串あげ 一、五〇〇円

一見、パブ風のインテリアにふさわしくモダンなセンスで揚げられる。「他店にはない」串あげも美味。

立花家

柴崎町3丁目 ☎(22)2377

花ロース定食 一、六〇〇円

美味は材にあり。肉の品質では定評がある。いつ食べても同じ味、をモットーに揚げるカツにファン多し。

銀狐

高松町2丁目 ☎(25)2929

ロースカツ定食 九五〇円

ご主人の実家が精肉店というから、これは強い。分厚いカツがカラッと揚がる技術、教えてくれないかなあ。

旨さのヒケツは肉、衣と合う特製ソースにあり。

寿限無

錦町2丁目 ☎(23)5683

とんかつ定食 九〇〇円

店の歴史では市内で指おりの専門店に入る。こつこつ積みあげてきた味の信頼は絶大。小宴会も可。

ゆづ花

錦町1丁目 ☎(26)3566

おろしとんかつ 八〇〇円

花屋さんが一転、揚げもの店を開いた、さすがは美的センス。おろしとんかつは主人考案、渾身の一品。

正式コート・立川上陸
ペタンクをご存じですか。

PÉTANQUE

ペタンク——そんなの聞いたことないなあ。そういう人は立川では、もう「時代おくれ」なのだそうです。野球の球くらいの鉄の球をころがして遊ぶ、まあ、ビー玉の化けものみたいなこのゲーム。南フランスで生まれたペタンクは、実は日本でも粋人の間でひそかに楽しまれていたというのです、ズルイ！ それがいきなり立川に上陸、昭和記念公園にあります専用コートは本邦初の公式コートで、世界選手権にも使用可という本格。キミもどう？

←藤島クン「この球の重量感がなんともいえず、ヤミツキになりそう。」

←フランス人もびっくり。

スコアボード

←ビュットからの距離で得点が。

あるうららかな春の一日、コートを訪れてみると若葉町の藤島喜一クン、高橋知生クン、木口貴雄クンが、北村博史さん（日本レクリエーション協会）の指導でゲーム中だった。三人が口をそろえて「やみつきになりそう」。どこにそれ程の魅力があるのだろうか。「単純そうにみえて奥が深い」と、日本ペタンク連盟会長の由井昭さんも自信満々。この立川がペタンク王国、世界選手権なんてのもユメじゃなさそう。

←真剣な中にもなごやかなムードただよわせて。投げる人、木口クン。

←北村氏のフォームは、さすが。

立川・歴史のひとコマ
⑤富士塚の由来

富士見町一丁目の交番のそばに緑の木立につつまれた富士塚があります。

富士山を木花咲耶姫命（このはなさくやひめのみこと）の化身とあがめ、信仰の対象として登拝することは中世以降の関東・東海の農村でひろく行われていました。木花（このはな）とは桜のことで、白雪をいだいた富士の美しさを桜花満開の美にたとえたものです。富士の見える地方では、山の雪のとけていく形に従って田植の時期を知り、豊作を祈ったのです。

江戸時代に入ると、日本橋から朝に夕に仰ぐ山として江戸っ子に富士山は最も親しまれ、富士登山もさかんになりました。これが浅間神社の信仰と結びついて、長谷川角行という人が富士信仰の教義をととのえ講を組織したのが富士講です。白装束で金剛杖を手に、六根清浄を唱えてさかんに富士登拝を行いました。信心もさることながら、気心の知れた講の仲間との道中は、庶民にとってまたとない楽しみだったでしょう。この富士講は江戸中期には「江戸八百八講」といわれるほど隆盛をきわめました。

また富士講の人々は模造富士を江戸やその近くに数多く作り、浅間神社を勧請しました。信者はこのミニ富士に登っては信仰心を満たしたと云われています。

立川の富士塚がいつ築かれたかは明らかではありませんが、江戸中期の検地帳には「ふし塚」の地名が記されています。ところで、この富士塚にはこんな伝説があります。

『むかし、でえだらぼうが、でっけえ下駄をはいてあるいてきた。富士見町のあたりまできたとき、下駄の歯に土がつまってしまった。でえだらぼうは、足をふるって土をおっことした。その落ちた土が、一丁目の富士塚だということだ。土を持っていかれたほうは、池になった。それが三丁目のがけ下の、弁天池だそうだ。』『立川のむかしばなし』より　（K・K）

漢字テスト⑤

空欄に一字押入を試みよ。

陽春□雪
□里巴人

立川クイズ

わが立川は明治26年までは東京府（下）ではありませんでした。何県にあったでしょうか。

①神奈川県　②山梨県　③埼玉県

［5月号の答え］

（現在の中央線）最初に甲武鉄道が立川と新宿間に開通した時には5駅しかありませんでした。立川、国分寺、境、中野、新宿です。当時は一輌に8人が乗ると満員になったそうです。一日に4本の運行でした。したがって答えは③です。

「歩け歩けが50回記念」

4月27日に立川市教育委員会の主催で「立川市民歩け歩け運動」が高尾駅と相模湖間の15kmで行われた。3歳から70歳までの男女346人が参加。今回で50回目ということで中には今までのトータル距離が2200kmというツワモノもいた。市民の体力増強とコミュニケーションが目的で4月、11月、2月と年3回ある。

『メトロポリス祭』盛況!!

5月11日、昭和記念公園で、立川観光協会と公園緑地管理財団の主催で行われた。連休明けの日曜にもかかわらず8万人以上の家族連れがおとずれ、一日を楽しんだ。わんぱく相撲をはじめ、野点（のだて）、ラジコンカーレース、ミニ列車などで家族で楽しめるイベントがいっぱいだった。熱気球には長蛇の列が出来き昨年同様の人気。今年新しく好評をよんだのが、ミニ牧場。本物の牛を前に、すっかり牧場気分でゴキゲン。今年で3回目の『メトロポリス祭』は、すっかり立川の名物行事となったようだ。

劇団はかせ・めいぐるみミュージカル
「宝島（たからじま）」
7月27日(日)　午前の部 11:00〜　午後の部 2:00〜
立川市市民会館大ホール
入場料 1,000円（全席指定）
●お問合わせ：
立川市市民会館
☎0425-26-1311

表紙は語る

立川駅北口、アートサロン『四季』でWORK SHOP 108展が四月に開かれ、立川人の眼をたのしませた。中村道雄さんの「組み木絵」作品は一段と光を増していた。

「木がもっている優しさですね。そういうものを、もう一度みなおしてみるきっかけになったら」と語る中村さんの表情は、すでに〝木の優しさ〟が移り住んでいるようであった。

材質のちがう木、色あいのちがう木を組み合わせて、一つの世界を表現していく。すべて手作業だけに、その根気たるや、尋常ではない。

〝風のうた〟は絵本『古い未来』を集大成した、幅二メートルもある大作だ。原作は個展にでも行かなければ、なかなか見れないので、プリント表現の機会も自然おおくなる。

「写真家も編集者も、木に愛情がないと成功しませんね」。えくてびあんに、その愛情ありやなしや。

漢字テスト・答

下里巴人（かりはじん）
陽春白雪（ようしゅんはくせつ）

通俗的な音楽、文芸作品のたとえ。歌謡曲、娯楽小説など大衆受けするもの。「陽春白雪」に対比。

「陽春白雪、和する者寡し」と続く。すぐれた人物の言行には大衆は調子を合わせにくいたとえ。「陽春白雪」は楚の国の高尚な歌曲の題名。

真如苑だより

つゆが近づいています。この雨を「うっとうしい」とみるか、天からの「慈雨」とみるか、あなた次第。今月も真如苑へおでかけ下さい。雨でもおでかけ下さい。やってます。

■日時　6月21日(土)　午後2時〜4時

■御本尊、真如宝物館をはじめとして映画など盛りだくさんの用意がしてございます。

■立川市民（成人）に限らせて頂きます。

■お申し込みは「えくてびあん・コンパニオン」（本誌を手渡してくれた人）へ。

工房から

●いまや立川も「グルメの時代」のようであります。おいしいお店を紹介すると、トタンに反響があります。こう云うのをゲンキンなもんだ、と表現してよろしいのでありましょうか。●来月号は創刊二周年記念にあたります。好評の「街角の瞳」をカットするのは誠に残念ですが、その替り、新企画をお贈りいたします。その名も「立川御馳走館」。どんなお店が登場しますやら、どんな料理がお目見えしますやら。●おいしいお店を知っているのはあなた、立川人です。「ひとには教えたくない店」を教えてください。〝味は文化のバロメーター〟なんて云うでしょう。この言葉に、軽薄に踊らされてみようじゃあないですか。●戸口から青水無月の　えくてびあん。

（編集）秋山光久　大野玲子　加賀桂子　神山満子　鶴川環　田中恵子　原田礼子　矢野義範
（写真）青木和博　天野武男　吉田義治　スタジオ269

月刊えくてびあん　第23号
昭和六十一年六月一日　発行
発行所　えくてびあん編集工房
東京都立川市柴崎町2-4-11　ファインビルディング　3F
電話　〇四二五(28)〇〇八二
編集人　立井啓介
発行人　沖野嘉男
印刷所　株式会社　立川印刷所

ふれあい農園の1日から 育つかなあ——

このところ、立川の大人も子供もすっかり「土いじり」から遠ざかってしまったようです。これはいかんと青年会議所が〝ふれあい農園〟をよびかけたら、集まったです、百五十人。ジャガイモ、トーモロコシ、キャベツなど円急に作業をすすめて、いい汗かきましたです。でも、育つかなあ?——

——育ちますとも！

→イモの芽を切らないように、小さなものも半分に。

味もホット。心あたたまるトン汁サービスは←青年会議所の皆さん。

→これちょうだい。お人形のつもり、カカシも光栄。

↑グループや野菜の名前をつけて、実り待ってます。

古着にワラを詰めて…、→個性的なカカシ。